
今日の空色

羽棠 桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日の空色

【Nコード】

N7858M

【作者名】

羽棠 桜

【あらすじ】

空を見上げるのが好きです。

お天気はもちろん、見上げたときの気持ちで、空の見え方や感じ方は違ってきます。

空を見上げたときに浮かんだ気持ちや言葉を、短歌にしました。私の目に映った空と一緒に見上げて、感じていただけると嬉しいです。

空色 (H21年9月)

日が昇り 雲のベールが ほどけてく 一日の幸 胸に描いて
風を受け 途切れちぎれて 流れてく 辿り着きたい あたたかい
場所

晴れ渡る 雲のない空 続く青 青の向こうに 夢みた笑顔

雲たちが 夕焼け空に 向かってく あしたのために 待つひとの
ため

朝の空 ふわふわ浮かぶ ひつじ雲 浮き世のながれ 知らぬふり
して

お月さま 雲の隙間に かくれんぼ 切ない気持ち 置き去りのまま

2

曇り空 見上げたきみの 横顔に 光る滴と 弱さ隠して

雨の朝 雲の架け橋 紅を 映した昨日 思い出になる

胸いっぱい 澄んだ空気を 吸い込んで 足取り軽く 前に進もう

風吹かれ 朝日のもとで 雲なびく 胸の揺らぎを 呼び起こす風

雨のあと 夕焼け雲に 光さす 思いの端を 繋ぐぬくもり

もう少し 遠い空へと 手を伸ばし 面影を追う きみに触れたい

少しずつ きみのとなりで 感じてる 温かさこそ ぼくのしあわせ
きみ思う 風の向こうに 浅し夢 いっしかここに きみと寄り添う
涼しさと 目覚めた朝の 薄明かり となりに眠る きみの愛しさ
夢のなか あなたの姿 追いかけて 差し伸べた手に 風がざわめく
爽やかに 空澄みわたり 朝日さす 穏やかな顔 胸に描いた
落ち込んだ 湿った空気 吹き飛ばし 駆けてみようか 光さすほう
光さす 見上げた空に 揺るぎない 未来描いて 祈りをこめて
朝焼けの 輝く雲の きらめきに 優しく包む きみを感じた
見上げれば いつか見た空 蒼の色 同じ夢見た 想いをこめて
もう少し 遠い空へと 手を伸ばし 面影を追う きみに触れたい
雨誘う 雲の流れに 身をまかせ あの頃にみた 夢に漂う
雨粒が 溢れ落ちてく 足元に 涙と混ざり 弾け消えゆく
君となら 遠い道でも 歩けると 固く繋いだ 手の温かさ
大丈夫 笑ってみせた きみの背に 伏せた涙と 募る愛しさ
まっすぐに ヒカリ目指して 駆けぬけた 描いた夢は この手の
中に

(2009年9月19日～9月30日)

空色 (H21年10月)

温かさ 滲む心に 空の蒼 ただ、触れたくて 両手翳した
どんよりと ホームから空 見上げれば 浮いた気持ちを 抑えこ
む雲

朝日射す 戻ってきたよ 青の色 駆ける子どもの 歓声響く

きみの手が ふと引き寄せた 秋晴れの 風に揺られる 大木の陰

雨雲に 閉ざされた朝 憂鬱に きみが囁く 温かな声

きみの頬 伝う滴を 掬い上げ 優しさに変え 包んでいたい

舞い降りる 雨粒のおと 響く窓 ヒトリの夜の 寂しさ癒す

嵐去り 澄みわたる空 浮かぶ雲 こころの向こう 覗いた笑顔

だいすきと あなたが言って くれるから まっすぐ前に 進んで
いける

夕暮れの きみのとなりに 寄り添って 風を感じた 心のすきま

同じ空 見上げたきみの 手のひらに 砕けた夢の カケラ集めて

高い空 大きくなった きみの背に いつか羽ばたく 姿描いた

ゆつくりと 自分のペースで 行けばいい 力をくれる あなたの

言葉

ひんやりと 朝陽差す窓 すきま風 温もり恋し きみの手握る
遠くまで 飛び立ちたいと 願う空 心縛るもの 解き放つ風
空仰ぎ 高く高くと 背伸びした きみの肩越し 愛しい笑顔
いつまでも 一緒と誓った 空の下 強く感じる つながる心
すれ違う 固くて脆い 絆だけ つなぎ止めたい その手掴んで
楽しみは 最後に取りっておくという きみの無邪気な 笑顔眩しい
もしも明日 あなたが笑ってくれたなら 伝えてみたい 勇気抱えて
この背中 羽根があるなら 青い空 彼方を見たい きみの手を取り
朝焼けの 澄んだ空気に 洗われた 心に浮かぶ 新たな決意
流れゆく 雲の途切れた 隙間から 差し込む光 心を揺らす
風に乗り 優しさ香る オレンジの 小さな花と 懐かしい声
とくべつな 人に会えたと 感じてた 高鳴る気持ち 本物だから
足元に 弾け消えゆく 光る粒 うまれた場所を 思い描いて
大丈夫 私の肩を 抱いた手に 力強さと 温かさ知る

ただ一度 一度限りの 夢なれど きみのとなりで 感じた奇跡
色づいた 桜の葉散る 帰り道 寂しくないよ 月が見ている
寂しいと 言えば隣にいてくれる 人がほしいと 思うときもある
強くなれ あなたがくれた一言が 歩き続ける 勇気をくれた

(2009年10月1日～10月31日)

空色 (H21年11月)

振り返り 涙を流す 今日よりも 楽しみ探す 明日描こう

朝焼けに 取り残された 星ひとつ 生まれ変わりゆく 新たな光
ひんやりと 風吹き抜けて 揺れる木々 温もり恋し きみの手を
取る

寒空に 届かぬ思い 切なさを 振りきるように 空を仰いだ

今夜だけ 一夜限りの 夢でいい きみに寄り添い 声を聴かせて
まっすぐに いつもあなたを 見つめてる 立ち止まっていいい 力
を抜いて

夢抱く きみの瞳に 映る蒼 飛び立てるかな 走りつづけて
ありがとう いつもとなりに いてくれて ずっと一緒に 歩いて
いこうね

朝焼けに 染まる彼方の 向こう側 きみと行きたい 手を取り合
って

一面に 空を覆った 雲の上 羽ばたくきみを 思い描いた

雨上がり 澄んだ夕空 風吹けば 木の葉が踊る 賑やかな道

秋晴れの 空に浮かんだ 雲眺め いつもとなりに いたいと願う

空仰ぎ 伸びゆくきみに やがて見た いつしかの夢 目を閉じ思う
時を越え かえってきたよと 空仰ぎ 風を掴んだ 手の温かさ
軽やかに 舞い降りてくる 紅い葉が 閉ざした扉 優しく叩く
夕空に のみ込まれてく 雲の群れ 明日へつづく 光に変わる
秋雨の 雫を受けた 紅の 艶やかな色 君と眺めて

大空を 洗い流した 雨上がり 冷たい風にも 新たな匂い
さわさわと 緑ささやく 石畳 落ち葉踏む音 心地よい風
不思議だね きみがとなりで いるだけで 強くいられる 優しく
なれる

澄んだ空 流れる雲の 行く先を 描いたきみの 笑顔愛しい
温かく 広いあなたの 背中越し 風に紛れて 囁いてみた
遠くまで 飛び立つ勇氣 くれたのは 心に眠る 大切な人
風纏い 遥かな彼方 舞い降りた きみの背中に 優しい羽音
教えてよ 頬を流れる 滴さえ 渴れた心に 残されたもの
たよりない 小さなきみの 手を握り 守っていききたい 決意した朝

清らかな 蒼に夢みる きみの目に 映る景色と 未来の欠片
消えるまで 共に歩こう きみとなら 絡めた指に 伝わる心
遙か空 風を纏って 舞い上がる 愛しい人の 思いをのせて
晴れた日は 屋上ひとり 深呼吸 冷たい風に 新たな匂い

(2009年11月1日～11月30日)

空色 (H21年12月)

朝靄に 浮かぶ景色と 朝の色 頬に優しい 爽やかな風

夕焼けを 映した雲が 流れゆく 空を見上げた きみへの思い

雨濡れて 輝きを増す 冬木立 寒さ忘れて 眺める背中

気まぐれな 雨粒落ちる 空見れば 虹のかかった 雲の架け橋

曇り空 向こうに潜む 青空を 羽ばたける夢 叶えてあげたい

大好きな きみと過ごした 時間だけ 輝いてたと 溢す横顔

寒い朝 隣で眠る きみの手が さらりと撫でる 温かな匂い

憂鬱を 掻き消すように 舞う風を 纏って進む 前を見据えて

遠い日に きみが誓った 優しさと 流した涙 忘れはしない

あの頃は 優しい言葉 囁いて 包んでくれた 寒い日の夢

いつからか 見えないカタチ 求めてた きみが描いた 空の蒼かな

澄んだ空 滑り降りてく 緩やかに 輝く翼 駆って飛びたい

空仰ぎ 感じてるのは いつの日も 愛しい笑顔 穏やかな声

密やかに 東の空に 浮かぶ月 朝日に溶けて 新たに生まれる

へこんだり 沈んだときに きみがいて 包んでくれる やわらかな声

寒くても 平気と笑い 駆けるきみ 風に負けない 元気をくれる

雲迫る 冷たい風が 凍みる朝 丸まるきみの 温もり愛しい

風吹かれ 流れる雲の 隙間から 溢れる光 優しい匂い

凍える手 押しつけはしゃぐ きみの顔 寒さ忘れる 駅までの道

ひらひらと 雪が舞う空 きみとゆく 重ねた肩に 伝うしあわせ

真新しい 蒼に染まった 空の下 風を追い越し 駆けていくきみ

寒空で 春待つ枝が 電飾に 彩られる道 心癒す夜

冬の雨 凍える体 きみの手が 触れた先から 優しく解す

真っ白な 霧立ちこめる 朝の空 吐く息さえも 溶かし消えゆく

きみが待つ 家路を急ぐ 夕空を 鮮やかに染める 優しい光

揺らいでる きみの心に 届けたい 仰いだ空は 繋がってるよ

晴天の 大樹の影の 小さな芽 寒さに耐えて 春待つ姿

あと少し ただそばにいて 欲しいだけ 伸ばした手から 溢れる
願い

いつの日も 笑顔でいてと きみの声 包む優しさ 陽だまりのよう
あの空の 彼方の雲の ひとしづく きみの足元 弾け消えてく
ありがとう くじけそうに なった時 元気をくれる きみが好き
だよ

(2009年12月1日～12月31日)

空色 (H22年1月)

新年の 空を仰いで 目を閉じた 大事なきみへ 思いを込めて
風に舞う カーテン掴み はしゃぐきみ 心をほぐす 小さなし
あわせ

散歩して 帰ってきたら きみがいて 飛びついてきた 満面の笑み
明日から 頑張らなくちゃと 気合い込め 空に向かって 叫んで
みたい

雲流れ 消えゆく先に 思い馳せ 仰いだ空に 面影を追う

帰り道 突然きみが しがみつく 寂しい思い させてゴメンね

空高く 風に吹かれる 雲のように 時間を忘れ 漂っていたい

暮れてゆく 雲に映った 夕焼けの 温かな色 胸に染み込む

きみがいる ただそばにいる それだけで 強くありたい 気持ち
になれる

寒い朝 頬を突き刺す 凍る風 愛しいぬくもり この手に想う

いつの日か 光の向こう 飛び立てる きみと信じて 共に進もう

とめどない 蒼の彼方に 描いてる きみの未来に ぼくはいるかな

流される 思いの端を 手繰りよせ きみと寄り添い 温め直そう
風打たれ 凍てつく頬を 包む手の 優しい匂い きみの温もり
思い抱く 心の奥に 眠るきみ いつか会えたら 夢を語ろう
思いなど 空に漂う 雲のよう 儂く消えて また生まれてく
綻んだ 記憶の欠片 繋ぎとめ 空に翳して あの日进行
きみがいて 隣で空を 眺めてる 黙っていても 伝わる思い
朝日射し 輝く霜を 踏むきみの 愛しい背中 両手伸ばした
好きだから ずっと隣に いたいよと 甘えるきみの 声に頷く
地上から 溢れる思い 受けとめて 高い空から 溢れる優しさ
朝の空 見上げたきみの 手を握り 引き寄せたなら 叶うだろうか
空仰ぎ 温かな場所 描いてる きみの思いを 守ってあげたい
覚えてて 何があっても 守りぬく 決めた心を 照らす朝の陽
空の端 雲がほどけて 消えてゆく 纏れた気持ち そっと癒して
きみとなら 同じ夢を 見ていたい ささやく声が 強さをくれる
空高く 漂う雲に あの頃の きみを思って 涙堪えた

近すぎて 気付けなかった 優しさが 空を仰いだ 頬を撫でてく
空に浮く さらり流れる 雲のよう 心預けて 流されてみよう
目を伏せた きみの心に 映る蒼 遥かな空へ 憧れ高く

(2010年1月1日～1月31日)

空色 (H22年2月)

遠い空 祈りを込めて 見つめてる きみの心に 届くといいな

好きだって ただ一言が 聞きたくて きみに抱きつく 青空の下

遙か空 仰いで風を 感じてた きみのところへ 飛んでいきたい

ぼんやりと 目覚めた朝の 静けさに きみの寝息と 触れた温もり

あの空の 蒼の彼方を 見つめてる きみの心は どこにあるかな

今きみの その手に力 あるのなら すべてを忘れ 駆け抜けてみよう

夢見てた あの頃の空 思い出す きみと描いた 未来の色を

夕暮れの 飛行機雲の 差す方へ 思いを馳せた きみの凜々しさ

きみという ただそれだけが 嬉しくて 守っていくよ そばに寄り添い

鮮やかに 輝く蒼い 空の下 繋いだ手から 溢れる思い

見上げれば 果てしない蒼 潔く きみに伝えよう 思いのすべてを

伝えたい 思い果てなく あるけれど 飾らぬきみの 心は遠く

きみのため うたい続ける この空と 果てない思い いつか届けと

振り向けば きみと歩いた 温かな 日溜まりの道 優しい思い

雨空を 見上げた頬を 流れてく 雫の軌跡 温もり伝う

雨上がり 湿った空気 帰り道 傘を揺らして 足取り軽く

はつきりと 見えていた夢 あの頃に 戻れるのなら きみを抱きたい

空覆う ちぎれ消えゆく 雲に似た 思いのカケラ 受けとめ抱いた

枝揺らす 冷たい風が 頬を打つ 暖が恋しい きみに会いたい

遠い風 離れた場所で 見た夢も きみと感じる 空の何処かで

まっすぐに 進んでいくよ 明日のため 隣に寄り添う きみのためにも

頑張れと 高い空から いつの日も 見守るからと きみが背を押す

空の上 静かにきみを 見つめてる 優しい光 ここに届いて

暮れてゆく 今日の空へと 手を伸ばし 心解き放て 夢に届けと

春近い 朝陽に向かう 銀翼の 遥かな軌跡 辿るきみの背

きみのため 流す涙の 雫さえ 吹かれ消えゆく 春の嵐に

いつまでも 見上げてみよう 空の色 心の行方 風にたずねて

空仰ぎ 思いを馳せる きみの目に 映してみてもよ ぼくの姿を

(2010年2月1日～2月28日)

空色 (H22年3月)

空浮かぶ 雲を眺める 心には 陰りなどない 澄んだ蒼色

朝日差す 雲を照らした 東から 今日の始まり 新しい風

青空に 輝く雲の さざなみを 見上げて思う きみに伝えたい

今はただ きみのことだけ 見ていたい 思いの端を 繋ぎ届けよう

忘れない きみと約束 交わした日 ともに飛び立つ 遥か空へと

叶えたい きみが教えてくれた夢 いつかとなりで 歓びあおう

負けないよ きみがいるから 頑張ると 心に誓い 踏み出す一歩

朝日さす 東の空を 見上げてる きみの手を取り 歩いていこう

雨の朝 重い空気を 吹き飛ばす きみの笑顔に 早くあいたい

まっすぐに 空へと芽吹く 逞しさ 春の匂いを 彼方に求め

風に散る 雲に紛れた 温かな 日差しにきみの 優しさを思う

緩やかに 雲の行き交う 空の上 漂う心 きみに預けて

止まらない ひたすら前に 突き進む 風に立ち向かう きみを支えよう

繋いでよ きみと歩いた この道で 見上げた空は 懐かしい色

春の風 蒼の彼方から 舞い降りて 纏れた心 解すやさしさ

もうすぐね 早く会えると いいのにね きみの向こうの 優しい
空色

春近し 風が優しく 髪撫でる いつかのきみの 温もりに似て

羽ばたいて 花咲く向こうの 青空に 信じているよ いつか叶うと

遙か空 オレンジ色が 眩しくて 翳した手から 滲む温もり

真っ青な 雲のない空 ひとすじの 飛行機雲が 描いたキセキ

空仰ぎ 風に任せて あるがまま 歩いていこう 心呟く

はなさない 見上げた空に 誓うから この手はずっと 握り締め
てて

今日の色 明日の空と 違う蒼 見上げた数の 空があるのかな

雨の朝 憂鬱な雫 吹き飛ばす きみの姿を 追いかけ行こう

降り続く 雨に溺れた 足元に 明日を夢見る 小さな蕾

晴れたねと きみの笑顔が 嬉しくて その手を握り 抱き寄せた朝

青空に 浮かんだ白い 架け橋を 歩いてみたい きみの手を取り

鮮やかに 蒼に染まった 彼方から 頬を撫でてく 柔らかな風
あの頃に きみが描いた 空に似て 巡る思いと 零れた滴
澄んだ空 仰いだきみの 心には 曇りなどない 輝き充ちて
きみと見た 空によく似た 青色が 季節を巡る 変わらぬ思い

(2010年3月1日～3月31日)

空色 (H22年4月)

風に散る 雲の隙間に 覗く蒼 見つめた川面 恋し流れる

桜咲く 枝を揺さぶる 強い風 花散らさぬよう 祈るきみの目

ふんわりと 浮かんだ白い 雲眺め きみに触れた手 翳した思い

爽やかな 春の風に乗る しあわせの 音が聴こえる 大切なとき

空に向く あの花のように 遅しく 咲き誇りたい どんな時にも

今だけと 空を彩る 満開の 桜の色に 愛しさ募る

顔を上げ 花咲く枝の 向こう側 覗く青空 やさしさ香る

きれいだよ たわわに咲いた 花の色 輝きを増す 空の蒼に映え

曇り空 桜の花を 見上げれば 勇気溢れる 強さをくれる

うららかな 陽射しが揺らす 花びらの やさしい色に 潤む空の蒼

風に乗る ひらり舞い散る 花びらに 去りゆくきみを 感じた涙

花濡らす 雨に負けじと 耐えるきみ あともう少し 空を飾って

蒼い色 恋しいきみに 会いたいと 花抱く枝 空に向かって

綺麗だよ 見上げた空の 蒼さより きみの花色 眩しく思う

ふんわりと 浮かんだ雲が あのだに 咲いたきみに似て 早く会
いたい

朝日さす 澄んだ青空 きみの色 輝かせてよ どの花よりも

風吹かれ 青空を舞う 花びらを 捕まえたくて 両手伸ばした

きみ香る 蒼き空の下 目を閉じて 近づく別れ 見えぬふりして

曇り空 きみが見守る 通勤路 やさしい声が 背中を押した

花濡らす 雫がきみを 鮮やかに 輝かせるから 雨も許そう

晴れた空 澄んだ空気を 吸い込んで もう少しだけ 頑張ってみ
よう

ありがとう 今年もきみに 会えたこと 見上げた空に 感謝して
るよ

冬に似た 冷たい風に 耐えて咲く きみの姿が いとおしい朝

夕暮れの 近づく空に 厚い雲 光を抱いて 独り占めかも

真っ青な 空に輝く 光さえ 心見透かす きみに思えて

曇りゆく 空を仰いで 感じて 風の匂いと 木々の囁き

雨の朝 元気をくれる きみの色 いつもここから 見守っていてね

きらきらと 朝陽を浴びて 揺れる葉の 奏でる詩に 耳を澄まして
澄んだ蒼 流れる雲を 追いかけた きみの背中に 愛しさ募る
ついさつき きみは確かに ここに居て 教えてくれた 鮮やかな
日々

(2010年4月1日～4月30日)

空色 (H22年5月)

きもちいい 朝の光に 目を細め 今日の期待に 胸踊らせて

夕空に 漂う雲の やさしげな 色が導く きみの元へと

鮮やかに 光のおいする方へ 見上げた空は 大好きな蒼

満開の ポピー従え 空仰ぐ きみの笑顔は 花に負けない

曇る空 緑ざわめく 庭に出て きみと語らう 何気ないとき

風揺られ 空を見上げる 白い花 漂う雲に 姿重ねて

雨上がり 芽吹く緑の 眩しさに 翳した手から 光零れる

青空に 漂う雲の その白さ けがれない色 心澄み渡る

空高く 飛べるはずだと 願うなら 信じてみよう きみに寄り添い

雨粒の 傘叩く音 軽やかに つられて歩く 濡れる足元

雨のあと 流れる雲の 隙間から 差し込む光 木々のざわめき

澄んだ青 清らかな色 きみの目に 夢みる光 見つけた笑顔

朝日さす 輝く雲の 向こう側 きみと見つけた 今日のしあわせ

ガラス越し きみの蒼さが 恋しくて 会いにきたよと 空を仰いだ

夕暮れの 家路を急ぐ 西の空 きみも見てるかな オレンジの雲

朝日受け 輝く雲の絨毯に きみの手を取り 飛び乗り行こう

空高く 萌える緑の 指す方へ 仰いだきみの 澄んだ眼差し

朝の空 輝きを増す 雲の端 覗いてみたい きみが笑った

雨粒が 緑に添える 煌めきに 気づいてるかな きつと知ってる

雨風が 洗い流した 空仰ぎ 光の匂い 辿って歩こう

眩しくて 目を塞いでも 感じてる 新たに芽吹く 緑の瞬き

朝の空 誰より早く 見上げれば 澄んだ景色を 独り占めかも

この雨が 清めの雨となるように 新たな日々に 祈りをこめて

目覚めれば 窓叩く音 雨粒の 戯れるような 賑やかな朝

輝ける 光をこの手に 掴もうと 空を仰いだ きみの凛々しさ

強風に 吹き飛ばされた 若い葉が 踊る道行く 肩を寄せ合い

昼下がり 眠気覚ましに 抜け出して 仰いだ空に 羽を広げた

朝日浴び 輝きを増す 鉄塔に 漂う雲が ひと休みかな

夕空に 溶けてく雲の 行き先を 尋ねたきみの 未来に会いたい

潔く 突き抜ける青 目指すように 立つトネリコに 我が身重ねて
うろこ雲 真昼の空に 光受け ゆらり輝く 水面のように

(2010年5月1日～5月31日)

空色 (H22年6月)

澄み渡る 空に翳した この思い 届くといいな きみの心に

暮れていく 空を見上げて 一日の 無事を感じて 明日を祈る

ゆっくりと 日差し傾く 西の空 輝く雲が 幕を閉じてく

青空に さらり流れる 白い雲 きみが笑った 綿菓子みたいと

晴れ渡る 空が見守る 運動会 きらめく汗と 笑顔愛しい

青空を 駆け降りてくる 雲の橋 虹を映して 輝きを増す

空覆う 灰色の雲 重たくて 支えてくれた きみにありがとう

おいしいよ 朝の空気を 味わいに 誰より早く 空を仰ごう

澄んだ蒼 輝く緑 溶ける白 胸熱くする この空が好き

また明日 きみの声に 似た風が 髪を揺らして 通り過ぎてく

天高く 寄り添い揺れる 双の木を 見上げて思う ふたりの姿

遙か空 きみの香りの 風が吹く そばにいるよと 懐かしい声

梅雨入りと 知らせが届く 昼下がりに 昨日の暑さ 和らげる雨

照り付ける 日差しを受けて 空の下 涼しさ求め 逃げ込む木陰

しとしとと 絶え間無く打つ 雨音に 耳を澄ませば せせらぎに
似て

雨雲を 振り払った空 真っ青に 澄んだ空気が 胸に染みてく

晴れが好き だけど暑さは 酷だねと 団扇片手に きみが笑った

大丈夫 悲しいわけじゃないんだよ きみを癒そう この一滴

空仰ぎ 重なる雲を 見渡して 笑顔零した きみの愛しさ

雲低く 引っ掛かりそうな 電線に 今日は見えない 戯れる鳥

灰色に 染まった空を 仰ぐきみ 傘を揺らして 何を思うの

青空に 蕩け流れる 白い雲 枝に立ち寄り 気ままな散歩

薄曇り 光求めて 見上げれば 寂しい色に 染まる鉄塔

梅雨雲は 何処へ行ったか 青空に からり吹く風 髪を撫でてく

足を止め 大樹の陰で 雨宿り 伝う滴の 音色優しく

雨風に 打たれる窓に 頬寄せて 恋し青空 思う横顔

澄んだ空 淡く漂う 白い雲 日差し遮る 心遣いかな

空高く 蒼の向こうに 思う色 描いて止まぬ 澄んだ心よ

晴れ空の 足元見れば 水溜まり 夢で聞いたような 雨音思う

今日も晴れ 最近雨は ご無沙汰と 口を尖らす 新しい傘

(2010年6月1日～6月30日)

空色 (H22年7月)

夕暮れる 西の空から 差す光 染み入る色を 僅か残して

帰り道 黒さを増した 空見上げ きみを感じた 雨の匂いに

土砂降りの 雨粒叩く 車窓から 明日は晴れよと 祈る横顔

青空を 貫く鉄塔 天辺に 光りのベール 清らかな風

晴天の 澄んだ果てない 蒼色に 勿体ないと 雲を描けず

雲の散る 空を仰いで きみ思う 日傘の陰で 微笑む姿

夕空を 懐かしんだ 一度だけ きみに恋した あの空に似て

雲たちが 別れを告げる 西の空 寂しくないよ ここにいるから

雨降りは 嫌いとはやく きみの肩 抱いて歩こう 同じ傘の下

キラキラと 光りを受けて 輝ける 空の向こうに きみの見た夢

遠い日の 心見透かす 夕空に 会えないきみの 姿捜して

雨上がり 蒼さを増した 空の下 イキイキと葉が 笑いざわめく

雨雲が 押さえ込むような 空気さえ 蹴散らすきみの 声が聴きたい

雲覆う 空を仰いだ きみの頬 光る滴が 映した心

今朝の雨 忘れ去るように 穏やかな 夕空の下 きみ追いかけて

雷鳴に 怯えるきみを 抱きしめて 暫しこのまま 切ない願い

梅雨去りし 見渡す限りの 澄んだ青 久しぶりだね きみの笑顔も

空に浮く 雲の白さが 映える蒼 眩しすぎると きみの背の陰

蒼深き 空仰ぎ見て 深呼吸 体を巡る 緑の匂い

旅立ちて 仰ぎ見る空 車窓から 途切れず続く 澄み渡る蒼

眩しさと 日差しが痛い 空の下 道行く人に 絶えぬ煌めき

西の空 彩る日差し 柔らかな オレンジ色に 暑さ忘れて

朝焼けに 纏れる雲が 染まりゆく きみの頬に似た 柔らかな色

晴れ渡る 空の端から 迫る雲 雨降らせても 許せる今は

この青は どこまで続いているのかな 仰ぎ見る夢 いつか叶えて

暮れる空 仰いだきみが 目を細め 眩く声が 溶けて消えゆく

さあ急げ 木陰に逃げよと 本能に 急かされ駆ける 風心地よく

曇り空 久しぶりだね 雨が降る たまにはきみに 会いたくなる
んだ

今朝の雨 すっかり忘れた 空色は 未だに覚めぬ 夢うつつかな
虹の先 宝が眠っていると言う きみが何より 宝物だよ

モコモコと 青空泳ぐ 白い雲 連れて行ってよ 私を乗せて

照り付ける 日差しの痛み 耐えながら 駆けよ急げよ きみが待
ってる

(2010年7月1日～7月31日)

空色 (H22年8月)

空仰ぐ 木陰の隙間 刺すように 睨む視線を 逸らし俯く

心地よい 風通りゆく 日陰から 空を見上げる きみの煌めき

青空に 漂う雲の 白い色 涼しさ誘う 見かけだけかな

賑やかに 暑さを煽る 蝉の声 短い命 燃え盛るさま

風に乗り 流れる雲の 行方追う 暑さ忘れる 癒しの時間

西の空 燃ゆるオレンジ 胸に染む 今日のしあわせ 感謝を込めて

風任せ 青空に浮く 雲に似た きみに憧れ 追いかけた日よ

まっすぐに 狙い定める 日差し避け 逃げた木陰の 風の涼しさ

緩やかに 暮れゆく空の 端染める 温かな色 きみと見上げて

眩しさは 恵みの証 見上げれば 優しく思う きみにも感謝

朝一番 仰いだ空の 深い蒼 今日を駆け出す 元気をくれる

雲の群れ 風に煽られ 流れゆく 連れて行ってよ 気ままな旅に

曇り空 木陰できみと 見上げつつ 胸が高鳴る 何処へ行こうか

空見上げ 雨降らぬよう 祈るきみ 傘なら一つ さしていいかも

夕空の 見上げた彼方 あの時が 思い出される きみといた日よ
暑さにも 慣れてきたのか 首筋に 光る滴が きみ輝かす

一面の 蒼に染まった 空仰ぎ 染みる暑さを 体に浴びよう

緑成す 木陰で涼む 足元に 限りある時 燃やした軌跡

夕空に 取り残された 雲たちが 輝き放つ ここにいるよと

お盆過ぎ 蝉の鳴く声 減ったねと きみと感じた 夏の終わりを

空を向き 伸び上がり咲く 百日紅 敵わないかも きみの元気には

まだ暑い 昼間は家で のんびりと きみと寄り添い 過ごす幸せ

いつまでも 見上げていたい この空を ささやかだけど 切なる
願い

空に向く 緑の木々を 騒がせる 風に感じた 秋の足音

青が染む 空を見上げて 軽やかに 家路を急ぐ きみにあいたい

燃ゆる青 未来を思う 瞳には 彼方の星の 光を映す

ありがとう きみと見上げる 同じ空 感謝のきもち 届くといいな

見上げれば 白いカーテン 眩しさを 遮る雲の 優しさかもね

猛暑日の 記録更新 たまらない そろそろ雨も 恋しくなるよ
いとし空 仰いで両手 差し伸べた 体に満ちる 風の歌声
蒼深く 染まりし空の 彼方へと 思いを馳せた きみは眩しい

(2010年8月1日～8月31日)

空色 (H22年9月)

振り向けば 夕映えの空 明らかに 胸に染み入る 明日への期待
頑張れと 蒼の彼方へ 突き上げた 拳に込めた 打ち勝つ勇氣
空目指し 伸びゆく木々の 立ち姿 憧れよりも 生きる意欲か
立ち上る 白い入道雲見上げ 姿重ねた きみにもたれて
衰えぬ 日差し突き刺す 空の下 追い立てられて 急ぐ足取り
風に乗る 流れる雲に 身を委ね 見知らぬ空へ 旅立てるなら
黒い雲 迫る夕空 寂しさを 抱え佇む きみ揺らす風
嵐去り 解ける雲の 隙間から 青が呼んでる 会いたかったよ
爽やかな 風に誘われ 見上げれば しっとり輝く 木々の緑よ
朝夕の 秋の気配に 負けぬよう 悪あがきかな 頑張る日差し
輝ける 空を彩り 去るきみの 名残がここに こぼれ落ちてる
じりじりと 衰え知らぬ 日差しにも 労う言葉 かけてあげたい
晴れ空に 流れ消えゆく 白い雲 きみの零した 涙にも似て

こんなにも 眩しい朝に 気づいてと 背中を押して きみが笑った
久しぶり 雨と出会った 帰り道 日傘にゴメン 眩きながら
雨上がり 虹かかる空 爽やかに 髪揺らす風 秋の足音
空はいい いつもそこから 見ていてね 負けたりしない 頑張っ
てるよ

雲の上 照らす日差しが 眩しくて きみに隠れて 抱きついてみた
柔らかに 日が昇ってく 空の端 そっと目を閉じ 気配を辿る

暮れてゆく 空を眺めて 車窓から 灯るライトの 物悲しさよ

空に向く きみの姿は その場所で 見てくれている 優しさこめて

雨雲の 隙間に覗く 青色に 頑張つてよと 叫んでみよう

雨上がり 澄んだ空気に 虫の声 秋の匂いが 溢れているね

風そよぐ ひやりと頬を 撫でながら 朝の足取り 軽やかにゆく

少しだけ 日差しに元気 戻ったね きみの笑った いとし横顔

真っ青だ 澄んだ空気が 気持ちいい 出かけたいなと きみにお
ねだり

空の端 溶けてく雲の 穏やかな 色が染みてく 胸が熱いよ

昼下がりに空を覆って 迫る雲 群れとなりつつ どこへ向かうか
モコモコと 浮かぶ雲たち 爽やかな 風流されて 心地よさげに
曇り空 役目果たした 傘を振り 明日の空色 思い描いて

(2010年9月1日～9月30日)

空色 (H22年10月)

夕闇の 迫る空さえ きみのこと 見守ってるよ 負けないでいて

すっきりと 澄んだ空から 降り注ぐ 日差しが痛い 懐かしいかも

お天気は 下り坂よと 傘渡し きみに抱きつく 早く帰って

傾いた 日差しが雲を 照らし出す 木々の影から 涼やかな風

輝ける 空よ流れる 雲たちよ 誰より早く 見上げる幸せ

見上げれば 日差し眩しい 雲だって 頑張ってるんだ 負けるものかと

ありがとう 同じ青空 仰いでる きみに出会えて 幸せだから

見上げれば 色付いてきた 桜の葉 秋が深まる 一雨ごとに

今日も雨 つまんないねと ぼやく君 家で寄り添う 時間も楽し

すっきりと 澄んだ空色 心地よく 深まる蒼に 感謝告げよう

遙か空 キノコ型した タワーから 滑り降りてく 愛し歓声

東から 差し込んでくる 光浴び パワー充電 頑張らなくちゃ

モコモコと 青空覆う 白い雲 かき混ぜたなら どんな色かな

晴れ渡る 青空の下 賑やかに 響く歓声 零れる笑顔

あの青い 空の向こうに 飛べるなら 広げた翼 どんな色かな

ゆらゆらと 水面に似せた 煌めきに 飛び込みたいと 心ざわめく

涼やかな 風を纏った きみの目に 映る青空 思い翳して

空が好き 言ってもきみは 知らん顔 ホントはきみが 一番好きよ

明け方の 布団に潜む きみの足 追いだそうとした 足が絡まる

大丈夫 雨は降らない 笑うきみ 傘を片手に 空を見上げて

雨だから 無理やり君に 渡された 傘が拗ねてる また出番無し

暮れてゆく 空を見上げて 立ち止まり 髪に戯る 風の寂しさ

空に向け 思いを翳す きみの背が 未来を映す 切ないほどに

雲流れ 湿った空気の 迫る空 見上げたきみの 横顔愛し

雨降りの 僅かな隙を 狙っては 飛び出し仰ぐ 空気の重み

冷えた風 雲が流れる 青空を 見上げて思う 散りゆく季節

昨日から 一変した風 寒さ耐え 追い縋りたい 駆け足の秋

しとしと 降り続く雨 冷たさに 寂しさ募る きみに会いたい

西の空 燃え上がる色 奥深く 触れた端から 零れる思い

ほっとして 仰いだ空を 流れゆく 風になりたい 思いのままに

晴れ空が 心変わりか 雨濡れる 枝葉眺めて きみが拗ねてる

(2010年10月1日～10月31日)

空色 (H22年11月)

青空に　ふわり浮かんだ　雲のように　流されるのも　悪くないかも
青さ増す　空流れゆく　雲の群れ　きみも見ている　思いを馳せて
輝ける　光の匂い　日だまりの　温かさかな　きみの背中
意外とね　狭いところで　私たち　見上げてるんだ　答え求めて
夕暮れる　空を見上げる　切なさ　きみといた日の　懐かしさかな
トネリコが　気持ち良さに　見上げてる　空の青さが　心揺さぶる
堂々と　天を仰いだ　観覧車　きみと乗りたい　あの頃思う
大切な　きみが待ってる　急がなきゃ　宣言するぞ　定時で帰る
吹き荒れる　風に煽られ　耐える木々　多忙なきみに　姿重ねて
晴れ空に　流され消える　雲見上げ　せめて夢だけ　温めてたい
銀翼が　胸を揺さぶる　通勤路　元気をくれる　澄んだ空色
雨上がり　空の蒼さが　元気無く　霞んで見える　砂の嵐か
休日の　日差し遮る　砂嵐　仰いだ空に　覗く寂しさ

空の端 不機嫌そうに 覗く顔 応援するよ 頑張るんだと

憂鬱を 吹き飛ばす風 冷たさと 優しさ纏い 頬を撫でてく

色づいた 葉に語るよう 柔らかな 日差しが注ぐ 楽しい道よ

波々と 雲の隙間に 覗く青 気持ちいいかも 寒いけれどね

明けてゆく 空の端から 溢れ出す 光がくれる 勇気を抱いて

青空に 向かう緑の 葉が揺れる 耳に優しい 音を奏でて

晴れ渡る 空に描いた きみの夢 いつか隣で 見せて欲しいな

見上げれば 色づいた木々 晴天に 映える彩り すがすがしさと

朝日さす 空を仰いで 思い出す きみと目覚めた あの朝の夢

ひんやりと 吹き抜ける風 胸の奥 落ち込む気持ち さらにって
くよ

またあした 一言零し 去っていく 潔さかな 西の残像

さらり舞う 白のたなびく 青空に 光る銀翼 颯爽として

晴れてるよ もこもこ浮いた 雲が呼ぶ きみと見上げた あの空
に似て

鮮やかに 染まる葉の色 空の蒼 出かけてみよう きみの手を取り

雲流れ 迫る夕闇 淋しさと 冷たい風が 胸に染みるよ

今さらに 明るさ増した 空の下 暁の色 思い重ねて

朝日差す 散り散りに雲 舞う空に 翳した手から 溢れる強さ

(2010年11月1日～11月30日)

空色 (H22年12月)

澄んだ青 師走の空を 抜ける風 背中を押して 通り過ぎてく

薄雲の ふわり覆った 水色が 気持ちを解す 空の優しさ

雨上がり 和らぐ寒さ 穏やかな 晴れ空の果て 嵐の匂い

空仰ぎ そっと息つき 人混みに 流されぬよう 足を踏ん張り

早起きの ベランダ越しの 東側 眺めて悩む きみを起こすか

昼下がり 散りゆく木々が 愛しげに 見上げた空を 舞い踊る風

曇り空 久しぶりなら いいけれど 寒さを連れる 困ったものね

空高く 澄んだ青さが 誘うから 乗り込もうかな あちらの電車

負けないと 冷たい風に 向かってく 強い心を 分けてほしいな

ただ気まま 流されるのが 仕事かな 辿り着くなら 任せてみよか

温かな 体の芯に 染みる色 見ていたいな 暫しこのまま

青空に 向かう緑の 葉が揺れて 心賑わす 寒さも忘れ

雨降りの 塞ぐ気持ちを 蹴散らして 進む足元 水溜まりとは

寒くても 雨の空より 軽やかな 空気を纏い 午後のお散歩
風に乗る 空駆ける鳥 見上げてる 愛し横顔 窓際のきみ
顔を上げ 雲の向こうの 青色に あの日と同じ 風を感じて
夕暮れの 迫る西空 燃え上がる 心を揺らす 刹那の色よ
空浮かぶ 雲の飛び石 軽やかな 耳に優しい きみの足取り
染みていく 空を眺めて 懐かしむ 穏やかな日々 きみの面影
雨粒が ぽつり鼻先 掠めてく 世話になろうか 傘をぶらぶら
朝もやに 霞む東の 空よりも 澄んでいるよね 真上の蒼さ
一歩ずつ 仕事に向かう 人波の 中からひよこり もはや息継ぎ
晴れ空の 日差しを浴びた 心地よさ こたつで思う まどろみの中
青色に 呼び起こされた 衝動と やさしさ香る イヴの思い出
明け空の 雲の隙間を こぼれ落つ 光りが寒さ 忘れさせるね
夕空を 眺めるきみの 背中越し 握りしめてた 募る思いを
朝がきた 見上げた頬を 掠めてく 冷やかな風 ゆるい目覚まし
冷やかな 風を伴う 雨模様 手が逃げ込んだ ポケットの中

頬叩く 凍てつく風に 雲さえも 飛ばされていく 澄んだ青空
雨上がり 雲間に覗く 日差し受け 顔を上げよう 気持ちいいから
寒さ増す 曇り空から 去り際の 切ない思い 受け止めたきみ

(2010年12月1日～12月31日)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7858m/>

今日の空色

2011年11月13日11時02分発行